

# 教育センター・ニュース

Education Center, Tottori University

NEWSLETTER No. 4

第 4 号 2010 年 11 月 30 日発行

## 目 次

・教育センター全体の活動（人生論講座／鳥取大学学／鳥取学／本の展示会）	-----	1
・教育開発部門の活動（大学教育研究センター等協議会／SPOD／桃太郎フォーラム 等）	-----	4
・外国語部門の活動（英語・初修外国語に関する懇談会／事前英語研修引率）	-----	8
・健康スポーツ部門の活動（スキー実習受付／トレーニング使用説明会／附属学校教育支援 等）	---	9
・教職教育部門の活動（教職履修カルテ／教員免許状更新講習／教育実習／教育臨床相談 等）	-	9
・連載FD講座、お知らせ、とりりリーマン川柳、関係教員名簿	-----	10

### 教育センター全体の活動

全学共通科目の教養科目は「基幹科目」・「主題科目」・「特定科目」の3種から成ります。うち「特定科目」では従来の学問領域・授業形式に規定されないユニークな授業科目が開設されていますが、その多くは教育センター専任教員の企画・立案によって運営されています。以下、夏期休業期間に集中講義として開設された「人生論講座」、「鳥取大学学」、及び後期開設のオムニバス講義「鳥取学」について紹介・報告します。

#### ●夏期集中講義「鳥取大学《人生論》講座」

特定科目「鳥取大学＜人生論＞講座」（前期・集中講義）が、9月21日（火）－24日（金）の4日間にわたって開催されました。この講座の目的は「実在の人物やフィクションの主人公の生き方を学んで、受講者の生き方をより明確なものにする」、「様々な人間観、世界観を知って視野を広げる」というものですが、学外から鍵山秀三郎氏（(株)イエローハット創業者）、町田宗鳳氏（広島大学大学院教授）を迎えたほか、学内から本名理事・副学長、清水副学長、細井工学研究科教授を講師に加え、充実した講演・講義が続きました。

受講希望者は108名、うち単位取得者は80名でした。受講者は「ミニ感想」を10回書き、小論文を1編仕上げました。学外からの聴講者も若干あり、またこの講義は米子キャンパスでもLANを利用した遠隔講義として実施されました。

（外国語部門・武田修志）

### 「人生論講座」日程

- ①第一日：9月21日（火）
- 1 限 『ダギーへの手紙』をめぐって 武田修志
  - 2 限 「星野富弘の詩と人生」 武田修志
  - 3 限 「人生の作法・仕事の作法」 鍵山秀三郎
  - 4 限 鍵山氏への質問とディスカッション
- ②第二日：9月22日（水）
- 1 限 「人生を歌った詩」 武田修志
  - 2 限 「人間力を考える」 細井由彦
  - 3 限 「土壌学と私の人生」 本名俊正
  - 4 限 副学長への質問とディスカッション
- ③第三日：9月23日（木）
- 2 限 「フロムの『生きるということ』をめぐって」 対談
  - 3 限 「幸福な生き方を見つけよう」 町田宗鳳
  - 4 限 町田氏への質問とディスカッション
- ④第四日：9月24日（金）
- 1 限 「映画『東京物語』について」 武田修志
  - 2 限 『東京物語』の鑑賞とディスカッション
  - 3 限 「山本周五郎作品に見る男の生き方・女の生き方」 清水克哉



## ●夏期集中講義「鳥取大学学」

9月27日(月)－30日(木)の4日間、夏期集中講義の特定科目「鳥取大学学」を開講しました(=写真)。鳥取大学学は、本学において先端的・特長的な研究・教育を実践されている方々を講師に招いたオムニバス形式の講義です。従来のオムニバス講義では講師の方々に成績評価もお願いしていましたが、本講義においては、昨年度開講した学生参画型授業「プレゼンテーションの戦術」等で開発した教育方法論を適用することにより、成績評価を教育センターで一元的に実施することを可能としています。

学生は本講義にて自分の専門外のトピックスについて考察することによって、将来の研究活動に不可欠となる論理的思考力を伸ばします。

鳥取大学学と同じ方法論は、後期開設の特定科目「鳥取学」においても採用されています。

(教育開発部門・桐山 聡)



「鳥取大学学」講師・題目一覧

### ①第一日：9月27日(月)

- 1限 理事・副学長 本名俊正  
「地球環境と食料問題」
- 2限 工学研究科教授 伊藤敏幸  
「革新的液体イオン液体」
- 3限 工学研究科准教授 溝端知宏  
「タンパク質の形、働きそして病気」
- 4限 地域学部教授 小野達也  
「政府・自治体の政策を評価する」

### ②第二日：9月28日(火)

- 1限 農学部教授 山口武祝  
「作物愛は地球を救う—観察眼を養おう—」
- 2限 地域学部教授 住川英明  
「文字を書くことの学び方」
- 3限 副学長 井藤久雄  
「がん予防の戦略—台所でできるがん予防—」
- 4限 地域学部教授 門田真知子  
「クローデルと漢字の世界」

### ③第三日：9月29日(水)

- 1限 地域学部教授 鶴崎展巨  
「ザトウムシ類の地理的分化と中国地方の生物地理」
- 2限 農学部教授 古川郁夫  
「山陰木器考古学事始」
- 3限 工学研究科教授 福井茂壽  
「コンピュータのメカニズムに挑む  
—ハードディスクのナノテクノロジー—」
- 4限 工学研究科教授 石井 晃  
「大ヒットは数式で予測できる！  
—映画 AVATAR から砂像フェスまで—」

### ④第四日：9月30日(木)

- 1限 農学部教授 前川二郎  
「きのご遺伝資源の発掘と保存」
- 2限 地域学部教授 野田邦弘  
「アートが地域を再生する」
- 3限 学長 能勢隆之  
「知と実践の融合」

## ●特定科目「鳥取学—とっとり再発見—」開講

後期開設の特定科目「鳥取学」が10月5日(火)より開講しました(=写真)。この講義は、毎回学内教員とともに学外講師(自治体関係者、NPO関係者など)を招きながら、鳥取大学が立地する鳥取を様々な角度から考察するオムニバス形式の授業です。今年度は桐山・後藤・松本・武田(元)の准教授4名が企画・運営を担当しています。

今年度も昨年と同じく文化・歴史を焦点に編成してありますが、全15回のうち13回が学外講師、うち7名は新規に依頼し、講師陣に変化をつけるよう工夫しました。また、なるべく多くの学生に履修機会を保障する観点から、開設曜日・時間を昨年(月曜3限)から火曜3限に移動しました。

なお学外講師のうち2名は明治大学の教員で、鳥取学は共通教育の分野における明治大学と本学との連携を図る役割も果たしています。

(教育開発部門・武田元有)



2010年度「鳥取学」講師・題目一覧

- ①10月 5日 竹内 功 (鳥取市長)  
「若者に魅力あるまち鳥取市を目指して」
- ②10月12日 能勢隆之 (鳥取大学学長)  
「鳥取学の課題」
- ③10月19日 平井伸治 (鳥取県知事)  
「とっつりの未来を開く」
- ④10月26日 濱田竜彦 (鳥取県教育文化財団)  
「鳥取の遺跡から読み解く縄文・弥生時代の暮らし」
- ⑤11月 2日 中原 斉 (鳥取県文化財課)  
「鳥取の古代寺院を復元する—白鳳の精華・上淀廃寺跡—」
- ⑥11月 9日 吉田悦志 (明治大学・国際日本学部)  
「映画監督・岡本喜八一『座頭市』物語を軸に一」
- ⑦11月16日 上場重俊 (鳥取県農業農村担い手育成機構)  
「鳥取県農業の来たちと今後の展望」
- ⑧11月30日 谷守正寛 (鳥取大学・国際交流センター)  
「鳥取方言の地域性」
- ⑨12月 7日 原島知子 (鳥取県文化財課)  
「鳥取の祭り・行事」
- ⑩12月14日 大江啓司 (鳥取県文化観光局観光政策課)  
「鳥取県の民芸」
- ⑪12月21日 西田良平 (放送大学・鳥取学習センター)  
「山陰海岸ジオパーク」
- ⑫ 1月11日 鎌澤圭伸 (因幡万葉歴史館)  
「万葉集の魅力」
- ⑬ 1月18日 中島諒人 (演出家・「鳥の劇場」主宰)  
「劇場が社会とともに在るために」
- ⑭ 1月25日 宮本大人 (明治大学・国際日本学部)  
「漫画と鳥取——主な出身作家をめぐって——」
- ⑮ 2月 1日 榊田知身 (境港市観光協会)  
「妖怪によるまちおこし」

●読書力はどうだ！本の展示会

特定科目「鳥大読書ゼミナール」で取り上げられている本と担当教員の著書・論文を、「読書力はどうだ！本の展示会」と題し、10月4日(月)ー11月5日(金)の一カ月間、中央図書館一階ホールにおいて展示しました(=写真)。目的は「読書ゼミナールで取り上げられている本と担当教員の著書・論文を、学生・教職員へ広く知らせることで、読書の勧めとする」、「特定科目『読書ゼミナール』への関心を高めて、この科目の履修を促す」というものですが、図書館職員の話では、図書館を訪れる学生の相当多数が展示本を見るとともに、時折、展示本の中から文庫本を中心にして、借り出していったということです。また、担当教員の論文の抜き刷り 30 編余りを「持ち帰り自由」として展示しましたが、そのほとんどが持ち帰られました。(外国語部門・武田修志)



## 読書力はどうだ！本の展示会

鳥大読書ゼミナールで取り上げられている本と担当教員の著書・論文を展示しています。鳥取大学の読書家達はこんな本を読んで、ディスカッションし、楽しみあい、読書力をつけています。あなたも本を手にとってみて、そして読んでみませんか？

【展示場所】中央図書館一階ホール  
【展示期間】10月4日～11月5日

【展示図書】

- 司馬遼太郎『街道をゆく 1～30巻』
- 古川英治『宮本武蔵 1～8巻』
- 夏目漱石『三四郎(復刻版)』
- 三浦綾子『三浦綾子小説選集』
- 山本周五郎『山本周五郎テーマ・コレクション 全8巻』
- 結城浩『数学ガール(ゲーデルの不完全性定理)』
- 村上龍『希望の国のエクソダス』
- レイチェル・カーソン『沈黙の春』
- ポアンカレ『科学と方法』
- 宮沢賢治『童話話集3(司修挿画)』
- 堺憲一『あなたが歴史と出会うとき』
- 小林秀雄『考えるヒント 1 2』
- 福澤諭吉『福翁自伝』
- テカルト『方法序説』
- 大野晋『日本語練習帳』
- 藤原正彦『祖国とは国語』
- 榊田知身『犠牲』
- ドナ・ウィリアムズ『自閉症だったわたしへ』
- 吉田武『オライバーの贈物』

そのほか多数



読みたい本が見付かったら、その場で借り出すことができます！

## 教育開発部門の活動

### ●大学教育研究センター等協議会

高等教育に関する全国共同利用拠点として東北大学、名古屋大学、京都大学、愛媛大学の4大学が選定されたことを受けて、現況を調査するため、8月25日（水）に東北大学で開催された全国大学教育研究センター等協議会に参加しました。以下に各大学の取組み概要を記します。

名古屋大学・准教授・中井俊樹氏から「FD・SD教育改善支援拠点と大学教育開発の今後」について発表がありました。取組みの特色は、教材（主に教員向け）を開発していることにあります。教材を教員がいっしょになって作ることによって Learning by Teaching につながっており、教材開発自体が教員のFDにつながっています。FDのノウハウを集積した冊子であるティップス先生シリーズは、7万部印刷しています。

京都大学・助教・石川裕之氏から「相互研修型FD共同利用拠点」について発表がありました。新しいことを外部から導入するのではなく、既に個々の大学で日常的に取り組まれているFDを組織化することが京都の拠点の責任と考えているとのこと。これまでは拠点の形成をしてきましたが、今後は拠点の共同利用を進めていく予定で、拠点の業務は、①学内、②地域、③全国、④国際の4つのレベルがあります。

愛媛大学・教授（副学長）・弓削俊洋氏から「愛媛大学『教職員能力開発拠点』一取組実績と今後の活動」について発表がありました。桐山からの「FDの成果としての学生の学力維持・向上について検証方法を教えて欲しい」という質問に対して、弓削氏から「学部間の垣根が低くなったこと」が成果として挙げられ、また「今年度からカリキュラム・アセスメント・チェックリストで学習成果等を検証しようとしている」との補足説明がありました。

東北大学・教授・羽田貴史氏から「東北大学高等教育開発推進センターと教育関係共同利用拠点構想」、すなわち大学教員養成プログラムについて発表がありました。予算をもらっている5年間で疲弊してしまわないように、6年後を見据えて現在の取組みを行っているとのこと。大学教員のキャリアや特性に応じて養成プログラムを開発しています。

（桐山 聡）

### ●四国地区大学教職員能力開発ネットワーク

8月25－28日の4日間にわたり、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD: Shikoku Professional and Organizational Development Net- work in Higher Education）が開催されました。このうち、26・27日の5つのプログラムに教育開発部門・田畑部門長が参加しましたので、その概要を紹介し（以下、出張報告より転載）。

\*\*\*\*\*

#### ①「学生から学ぶ研究室教育のコツ」

愛媛大学グループ（佐藤浩章・城間祥子・山内一祥・谷中恭伸の各氏）が講師を務め、到達目標として、①自身の研究室の改善の提案、②先輩後輩の関係作りのコツ、を掲げる。内容は、2つのレクチャーと2つのグループワークから構成されていた。佐藤氏のレクチャーの後、最初のグループワークで、仮想の研究室での教員と学生の仕事の具体例を付箋に書き、教員・学生・アカデミック・ノンアカデミックから組み立てられた4つの象限に付箋を分類し、グループごとに、作業結果の報告を行う。その後、徒弟制（講座制）からコースワーク制への転換による教育力低下などの研究室を取り巻く状況や、愛媛大学での調査結果の報告など、城間氏が研究室教育の必要性に関するレクチャーを行う。再びグループワークを行い、「学びのコミュニティ」としての研究室をどう機能させるかの提案をグループごとに行った。

#### ②「授業公開と授業アンケートの効果的活用方法」

愛媛大学・佐藤浩章准教授が講師を務めるセッションで、授業アンケートと授業参観を事例に授業改善の方法を学んで、受講者の所属大学でのそれらの特徴を分析して改善方法を述べることを目標にしている。レクチャーとグループワークの組み合わせで行われた。愛媛大の授業アンケートの分析の後、グループで所属大学の授業アンケートに関して情報を交換し合った。その後のレクチャーで、佐藤氏は、学習の4段階評価（レベル1：満足度測定、レベル2：内容理解、レベル3：行動変容、レベル4：成果）のうち、授業アンケートはレベル1にすぎず、レベル2、3にするための活用方法を示唆した。さらに、大同工業大学の公開授業を事例として、

効果的授業参観のコツとして、ティーチング・スクエア、フォーカスト・ピア・オブザベーション、チーム・ティーチング、マイクロ・ティーチングの方法を提案し、授業公開の仕上げとしての授業コンサルテーションの概要を説明した（授業コンサルテーションのセッションに報告者は2日目に参加した）。

### ③「大人数授業でアクティブラーニング」

高知大学・塩崎俊彦教授が講師を務め、到達目標として、アクティブラーニングの考え方を説明でき、その具体的アイデアを自分の授業に応用できること、としている。まず、模擬授業で受講者にアクティブラーニングの体験をさせ、ミニレクチャーをヒントにして各自が自分の授業を振り返り、アクティブラーニングの方法を自分の授業に取り込むプランを立てる、という形で進められた。模擬授業「文学と社会」では「正しいだけの答えなんてききたないんや！」というコマーシャルの文言の「正しいだけの答え」の解釈と問題点を考え、隣の受講者と交換して互いに意見を述べ合った。レクチャーでは、大人数授業においてグループ学習によるアクティブラーニングは難しいので、学習者が一人でもやれるアクティブラーニングの方法を開発するという塩崎氏独自の見解が開陳され、2度目のワークで、自分の授業に上記のような、アクティヴ思考を促す問い掛けを考えた。報告者も「論理学」の授業で「(論理的) 矛盾」と「不正」の違いを気づかせるための設問と説明を考え、他の受講者に披露した。なかなか興味深いセッションだった。

### ④「どうする？授業コンサルテーション・授業研究会」

徳島大学・田中さやか特任助教を中心とするチームが講師を務めた。到達目標は、授業コンサルテーションと授業研究会の形式と目的を説明でき、参加者と情報共有を行う、というものである。ここでもレクチャーとワークが組み合わされていた。アメリカの大学ではFDの実質が授業コンサルテーションだとされるそうで、徳島大学の事例の紹介を通して、目的とプロセスの概要が説明された。コンサルテーションのモデル（役割）として、(医者が患者を診るような) 診断型と、(対等な立場で助け合う) 協働型があるが、鳥大で実施するとすれば後者が適切と考えられる。コンサルタントの役割は、データ収集・管理者、カウンセラー、情報提供

者であり、必要なコンサルテーションスキルとして、教員からの聴き取り・データ収集・授業参観での参与と観察・教員のデータ分析補助・自信を与える・共感する・FD 関連の知識といったスキルがある。実施のシステムとして、初任者研修から初めて、継続研修（教育者としての成長支援）により大学の教育力全体の底上げ、という組み立てが考えられる。レクチャーの後、グループで意見交換し、各自が所属する大学で行うためのコンサルテーションのプログラムを作成した。報告者は、①目的：教員の授業改善の能力開発と参加教員の教育力向上、そして教員間のFD コミュニティー形成、②形式：チームで半公開、③プロセス：初任教員からのニーズの聴き取り（アンケート）と授業参観・授業研究会（反省会）、④人材：FD 担当教員、⑤組織：教育センター（教育開発部門）、というプログラムを作成してみた。期待以上に情報量の多い有意義なセッションだった。

### ⑤「どうする？初任者研修」

徳島大学・宮田政徳准教授／吉田博特任助教が講師を務める、徳島大学チーム「どうするシリーズの第二弾」。到達目標は、初任者研修に必要なニーズを把握でき、ニーズにあった支援方法を見つけ、研修目的・目標を設定してプログラムを計画できる、というものであった。報告者は、同僚と協力して鳥大ですでに3回初任者FD研修会を企画・実施したが、一層すぐれたものにするための方法をこのコースで学び取ろうと思って参加した。まず、徳島大学全学FD推進プログラムとその一貫として2002年度からなされている初任者研修の紹介からレクチャーが始まった。それからワークで、テーブルごとに、受講者が自らの大学での初任者が抱えるであろう悩みや課題（＝ニーズ）を思いつくかぎりポストイットに書き出し、それを、責任度（高・低）と優先度（高・低）の軸で区切った4象限に分類した。たとえば、「シラバスの書き方を学びたい」という要求はFD担当者にとって優先度も責任度も高いが、「授業負担が多すぎる」という不満はFD担当者の責任ではない（管理者の責任）と分類した。再びレクチャーに戻り、徳島・愛媛・高知の3大学の実際の初任者研修プログラムの例が紹介され、国立教育政策研究所が作成した標準的な「新任教員研修プログラムの規準枠組」が提示され、3大学の「枠組み」も示された。それを参考にして、受講者各自が所属大学での初任者研修のプログラ

ムを作るといふ個人ワークを行い、それをテーブルのメンバーどうしで披瀝しあつた。報告者が鳥大で行つた初任者 FD 研修会がおおむね正しい方向にあつたことが確認でき、他大学の事例の情報により一層の改善のヒントも得られた。

総じて、2 日間の SPOD 参加により、今後の鳥取大学での FD 事業の企画・実施に関して、役立つ情報を得られたと思う。

(田畑博敏)

### ●桃太郎フォーラム XIII (岡山大学)

9 月 10 日 (金) の「桃太郎フォーラム XIII」(岡山大学)に武田 (元) 准教授と教務企画係・橋本主任が参加しましたので、概要を紹介します (以下、武田准教授の出張報告より抜粋)。

\*\*\*\*\*

本フォーラムは、各大学とも実施を義務付けられている FD 研修会の岡山大学版、すなわち基本的には岡山大学の学内向け FD 研修会である。ただし各大学の FD 研修会が通常は当然ながら学内教職員を対象としているのに対して、本フォーラムは岡山大学の学内関係者のみならず、学外関係者にも参加が認められている点を特質とする。

午前は 3 つの講演・企画が行われた。まず指針講演「第二期中期目標で目指すもの——教育面について——」(岡山大学・佐藤豊信 副学長)は、岡山大学の中期目標に関する副学長の講演で、学外者には直接関係しない話題であつたが、注目すべきはディプロマ・ポリシー、開設授業、成績評価の三者が連動したシステムの構想である。岡山大学はディプロマ・ポリシーとして 5 項目 (①人間性に富む豊かな教養、②目的につながる専門性、③効果的に活用できる情報力、④時代と社会をリードする行動力、⑤生涯にわたる自己実現力)を掲げるが、各授業科目のシラバスには当該授業の達成目標が①～⑤の要素をそれぞれ何パーセント含むかが表記され、また学生の成績評価では当該学生が①～⑤に該当する要素を合計何ポイント獲得したか表示される。この結果、学生は自分が①～⑤のなかでどの能力に優れ、どの能力に劣っているのか、判断材料を得ることができるという。システム化されているが、人間の能力をあたかも製造商品の仕様・性能のように計れるのか、あるいは計るべきなのか、根本的なところで疑問は

残つた。それでも、岡山大学の場合はディプロマ・ポリシーと各授業とをリンクさせる点で非常にシンプルであり、それに対して鳥取大学の場合は人間力と各授業とをリンクさせる試みがある一方、ディプロマと各授業との関係は希薄で、そもそもディプロマと人間力との関係、あるいはディプロマや人間力に関する学内認識も曖昧であり、この点では大きく立ち遅れているとの印象を受けた。

次に特別講演「学生の自立を支援する学士課程教育」(同志社大学 文学部・圓月勝博 教授)は来年の大学設置基準の改正に伴うキャリア・ガイダンスの法令化、それに向けたキャリア教育の必要について、また特別企画「SD推進のきっかけの為に」(山形大学 高等教育企画センター・杉原真晃 准教授)は教員の FD 活動とならば職員の SD 活動の必要に関して、短編コメディ 17 編を含む DVD『あつと驚く大学事務 NG 集』の上映を通し、説明した。

午後は 6 つの分科会 (①単位の実質化、②FD・SD、③大学院教育、④メンタルヘルス、⑤授業公開、⑥学生参画)が実施され、うち第 5 分科会「授業公開の現状と課題」に出席した。報告は 3 本から成る。

まず「薬学部におけるピアレビューの現状と課題」(岡山大学 薬学部・中尾浩史教授)について紹介する。薬学部では①学生評価・②同僚評価・③自己評価の三本柱からなる総合的な授業評価の一環として授業公開 (=同僚評価)が位置付けられている。その背景には、学生アンケートに対する教員の疑問・不満、すなわち「受講者数の少ない授業が高得点になる」、「気楽な授業、面白おかしい授業が高得点になる」、「ほとんど欠席している学生がアンケートに答えている」など、授業を評価する尺度としては正確さに欠けるという問題があり、授業公開はこうした学生アンケートの欠陥を補完する、同僚評価として行われている (註: なお薬学部では、学生アンケートの歪みを補正する一つの手段として、個々の授業評価 = 絶対評価と並行して、当該学期に履修した授業全体の相対評価、すなわち当該学期で満足した授業を 1～3 科目、不満足な授業を 1～3 科目を挙げさせるということを行っている。これによって、仮に全ての授業で、全ての項目に「全くそうではない」とマークした学生も、比較的満足した授業、最も不満足な授業を、それぞれ最低 1 つは挙げざるを得

なくなる)。したがって公開授業においては、不特定の教員が漫然と参観するのではなく、あらかじめ指定された5名のFD委員が評価シートのチェック項目に点数を記入しながら行われる。

授業後は反省会が行われるが、例えば被評価者の話し方に関して、リズムに乗って聞きやすいと好意的に評価する者もあれば、聞きやすいから眠くなると否定的に評価する者もあり、統一的・客観的な評価基準の在り方をめぐっては今も議論が続いている。現在はFD委員の教員が、任意で抽出した一部の授業(各期3つ程度)を評価するにとどまっているが、ゆくゆくは全ての教員が全ての授業を対象に評価することを目指している。

このように岡山大学・薬学部では、専門課程の授業科目を対象に、したがってお互い専門分野の近い教員同士が参観・評価している訳であるが、鳥取大学で検討されている全学共通教育の授業公開の場合、専門分野の上で授業担当教員と参観者(評価者)とのマッチングをどう図るかが大きな課題になると思われた。

次に「テレビ会議システムを利用した授業公開」(倉敷芸術科学大学 教育研究支援センター・小山悦司 教授)は、多地点接続装置を使用することによって、大学の講義を学外にもライブ映像として配信(=公開)できる、という意味での授業公開の紹介であり、最後の「Power Point、LMS サイトを利用した授業の試み」(岡山理科大学 FD推進室・滝澤 昇 教授)は、授業公開とは必ずしも接点のない話題の提供であったため、内容の詳細は割愛する。ただし、前者の多地点接続装置は、板書の解像度も高く、鳥取大学における医学部の共通教育問題を検討するにあたって興味深いと思われた。

(武田元有)

## ●国際セミナー&ワークショップ

平成22年9月29日(水)、文部科学省・国立教育政策研究所の国際セミナー&ワークショップ「新任教員研修プログラムの戦略的構築—英国PGCHEの実際に学ぶ—」が開催され、教育開発部門・田畑部門長が参加しましたので、概要を紹介します(以下、出張報告より転載)。

\*\*\*\*\*

午前は講演、午後はワーク・ショップから成り、最近トレンドとなっているレクチャー+ワークというスタイルの研修会であった(受講者は30名)。

まず午前11:00から12:40まで、英国レスター大学D・コックス Derek Cox 教授が、英国の新任教員が3年間の仮採用時期に取得を義務付けられるPGCHE(Postgraduate Certificate in Higher Education)について概要を説明した。英国では、1970年代から徐々に大学の教授資格証明の取得システムが整備されはじめ、高等教育アカデミーが管轄する、全英の教育職能基準枠組みに基づいて、各機関(大学等)は、60クレジットを標準とする修士レベルのパートタイム制の正規教育を新任教員に受けさせるという。中世以来の永い大学の歴史を持つ国だけに、各大学の裁量に任せる部分は任せながら、全英の大学のレベル維持を国家的観点から考慮していることが伺えた。

午後は、14:00から17:30まで、5グループ(4人一組)でワークショップを行った。最初に、新潟大学・加藤かおり氏のリードで、各グループで自己紹介の後、午前の講演で学んだこと、問題点や質問を話し合い、各グループごとにまとめて発表した。次に、山形大学・杉原真晃氏が、国立教育政策研究所の川島啓示氏を中心とするグループ(=本日午後の講師グループ)がまとめた日本版の基準枠組「新任教員研修のための基準枠組」をレクチャーし、それを活用して、各グループの各個人が、自分の所属する大学で行う「新任教員研修プログラム」を作成するワークを行う。最後に、長崎大学の岡田佳子氏のリードで、各グループで各自の研修プログラム案を披瀝しあい意見交換して、各グループで一案ずつ推薦案を決め、それを他のグループに紹介した。まとめとしてコックス氏がコメントし、質疑応答の後、閉会した。

英国の新任教員研修プログラムは、西欧中世のマイスター制度を連想させる「職能開発」の伝統が大学教員育成の中にも生きていることを感じさせた。また、国立教育政策研究所グループの「基準枠組」も、一つのスタンダードとして参考になりうるものであった。

(田畑博敏)

## 外国語部門の活動

### ●工学部学務委員との英語教育に関する懇談会

工学部の外国語履修単位変更にともない、8月9日に工学部学務委員との英語教育についての懇談会が開かれました。

8 学科の学務委員が、それぞれの学科の教育方針、英語教育についての要望等を説明し、教育センターの英語担当者がそれについてコメントする形で、忌憚のない意見交換が行われました。具体的な論点は、①工学部が英語を2単位増やす根拠はなにか、②増加2単位分の履修年次をいつにするか、の二点で、これについて種々の意見が開陳されました。

まず、2単位増の理由としては異口同音に、「基礎学力の低い学生が多く、3年生になって専門分野を学ぶ前に、徹底的に基礎的な英語力をつけさせたい」という意見が出されました。これにともなう履修年次についても、専門を学ぶ前の2年次で徹底的に指導すべきであるとして、2年次履修で全員の意見が一致しました。

さらに議論は展開して、いかにして学生の英語学習に対するモチベーションを維持するか、という大学英語教育における本質的な問題へと発展していき、適切な教材の選択、e-learning（現在導入しているアルクの学習ソフトなど）の有効活用、TOEICの受験による学習意欲の維持など、英語教育改善に向けての議論が沸騰しました。そして、今後は学部・教育センターが連携して、これまでに以上に学生の学習意欲向上のために努力すべきだということ意見の一致をみました。

### ●海外実践教育・事前アメリカ英語研修の引率

メキシコ海外実践教育カリキュラムに参加する学生9人が、小林昌博准教授に引率されて、カリフォルニア大学デービス校の英語研修プログラムに参加しました（=写真）。学生たちは8月5日から4週間、デービス校に滞在して研修を受けましたが、小林准教授も1週間、同大学に滞在して学生たちの現地での生活立ち上げのサポートを行いました。

学生たちのここでの研修目的は、メキシコのラパス市での本番研修に備えて十分な英語力を身につけることです。また、英語力のスキルアップのみならず、それぞれ地元の家庭にホームステイしてアメリカ文化を体験し、異文化に対する視野

を広げることも研修目的の一つです。学生たちのこうした研修風景を観察された小林准教授は「本学にも語学や留学に興味を持っている学生が少なからずいることはとても素晴らしい。今後このような学生がさらに増えることを期待したい」との感想を述べていました。



### ●初修外国語に関する意見交換会

9月30日に初修外国語会議が開かれ、1)平成23年度入学生の初修外国語科目と、2)3年次履修上級クラスの平成23年度新規開設についての検討がおこなわれました。

工学部からの「平成23年度入学生から2単位を必修とし、2年次履修については学科により選択又は自由単位とする」という提案について、初修外国語担当者としては現行カリキュラムの維持をかねてより要望してきましたが、学部の強い要請でもあり、最終的にこの提案を認めることになりました。この結果、平成24年度から工学部2年次生には「基礎クラス」は開講せず、「応用クラス」のみを開講することになりました。

また、かねてより検討を続けてきた上級クラスの新規開設については、平成23年度から試行することになりました。この新クラスは、2年次「応用クラス」単位取得者を対象として、3年次履修クラスをドイツ語・フランス語・中国語各1クラス開設するもので、クラス名称は「〇〇語上級」となります。

また、ハンゲル、スペイン語についても、継続的に初修外国語を学習したいという意欲のある学生向けに上級クラスを開設することを検討していく予定です。

（部門長：筏津成一）



## 健康スポーツ部門の活動

### ●教務関連活動

平成 23 年 2 月 21 日－2 月 24 日に大山で実施予定のスキー実習（定員 30 名）の申し込み受付を行いました。

### ●学生生活支援活動

武道場 1 階にあるトレーニングルームの本年度 3 回目（10 月 13 日）、4 回目（10 月 19 日）の使用説明会を開催しました。

### ●附属学校園における教育支援活動

#### ①陸上教室

5 月 12 日にスタートした陸上教室は 9 月 22 日に最終回を実施し、全 13 回の日程を終了しました。今年の教室は後半が炎天下、猛暑の中での活動でしたが、昨年の走運動、跳運動に加えて投運動も実施しました。

最終回に実施した 4 年生と 5 年生の調査（26 名）では全員陸上教室に参加して楽しかったと回答しています。また、教室への参加理由に「速く走れる様になりたい」を挙げている児童（15 名）は全員来年も参加したいと回答しています。

#### ②キッズスポーツ アンド スタディサポート

10 月 20 日に秋期コースをスタートさせました。全 8 回実施の予定です。なお、この秋期コースに対応した大学の講義の受講者は、日本サッカー協会公認の少年スポーツ指導者資格を取得出来ることになりました。

### ●社会貢献活動

10 月 23 日（土）、鳥取市米里地区公民館において「家族みんなで健康づくりーサッカーボールを使ってブラジル体操ー」と題して、健康講演会を実施しました（=写真）。当日は、お年寄りを中心とした 50 名ほどの地域住民を対象に、健康に関する講義とブラジル体操を実施しました。



（部門長：福元和行）

## 教職教育部門の活動

### ●「教職履修カルテ」の開発

8 月以降、第 5 回から第 8 回まで 4 回の会議をもちました。内容に沿った形で、名称を「教職ポートフォリオ」とすることとし、大まかなデザイン（「鳥取大学教職教育の到達目標」に基づく「自己評価シート」、教職関連授業毎の学習成果の証拠等々、ポートフォリオに容れるものと容器）を確定しました。またこれに関わって、来年度以降の教職カリキュラムの変更を検討しています。

### ●教員免許状更新講習

7 月以降順次実施し、当初の予定通り、必修 3 講座、選択 41 講座を終了しました。視覚障がいの方が受講されましたが、この件も含め大過なく終了できました。受講者の感想をみると、制度に対する不満は大きいものの、各講習については概ね好評だったと言えます。現在、各学部・各センターの協力の下、来年度の計画を策定中です。

### ●教育実習関係

9 月実習の反省を踏まえ、今後、病気等で特別なケアが必要な場合、実習申し込みの際に、学生本人が申し出ることができるようにしました。

また教育実習の手引き、実習日誌等について改訂を進めています。

### ●日本教育大学協会「研究集会」

10 月 16 日（土）、松江市で標記集会在開催され、山根部門長と小林（勝）准教授が参加し、研修を深めました。教職ポートフォリオの実践や、教職カリキュラムの見直し、附属学校の改革問題などについて有益な情報が得られました。

### ●教育臨床相談

小林（勝）准教授が担当し、以下の活動を行いました。

カウンセリング	16 件
コンサルテーション	13 件
スーパーバイズ	12 件
研修会講師	9 件

など。その他、附属小学校のピアサポート支援、ファミリーサポートなども行いました。

### ●教職相談

小椋特任教員を中心に、主に、教員採用試験 2 次試験の面接指導、相談を行いました。

### ●ワークショップデザイナー育成プログラム（社会人の学び直しニーズ対応推進プログラム委託事業）

10 - 11 月に 9 回の授業が行われ、大谷准教授が講師としてプログラムの推進に寄与しました。

（部門長：山根俊喜）

《連載》FD講座  
～第4回～

FD研修会について

教育開発部門：桐山 聡

教育センターでは新任教員向けのFD研修会や中堅教員を対象としたFD合宿研修会、そしてFD境界で名を知られた方々を招聘しての講演会を開催しています。

新任教員向けのFD研修会については、既に他大学で教鞭を取ってこられた方も、本学において着任された当初は新任教員という扱いになりますので、本研修会に参加されるケースがあります。当然、研修会のレベルについて事後アンケートでは物足りなさを吐露されます。一方、正真正銘、初めて講義を持つことになった方は、具体的な教示スキルについてのレクチャーをニーズとして挙げられます。

研修会を企画する側は、各参加者のバックグラウンドを考慮しながら、せいぜい3時間の研修時間内で受講生の皆さんに何を身につけてもらうかについて、毎回頭を悩ませます。大学を取り巻く状況が厳しさを増しておりFDの実施はそれとは無関係ではないということは伝えるべきこととして必須だと思っています。しかし、危機感を煽るだけでは教育改善には繋がりませんから、アクティブラーニングという今風の教示方法についての簡単な実習も取り入れたりしています。

企画当初は他大学からの借り物が多かった研修会の内容も、近頃では授業アンケートや各種調査結果を踏まえて段々と本学の特色が出てきたのではないかと思います。11月19・20日に開催される合宿研修会でも一工夫を加える予定です。

FD講演会のお知らせ

日時：12月17日（金）15時～17時

会場：湖山地区 共通教育棟 A20 講義室

米子地区 旧保健学科棟 323 講義室

①長尾博暢氏（鳥取大学キャリアセンター准教授）

「大学から社会への移行にFDはいかに寄与するのか」

②田中さやか氏

（徳島大学大学開放実践センター特任助教）

「授業コンサルティングの取り組みとその意義」

とりりーまん川柳

一、めんめんて どうだどうだと つきの宴

二、四〇〇円 学則よりも 効果あり

三、学生に 二語で語れる 授業なし

四、シューカツが 無い世に生まれ ホツとする

五、忘年会 今年最初の 飲み会だ

【評】一句、白熱する毎月の会議、一本では足りず。二句、上司の禁煙命令より奥さんの仕分け力。三句、二語で済む国会答弁とは異なる。四句、今日の学生は大変。五句、今年もよろしくお願いします？  
※このコーナーでは教職員の川柳を随時募集します（宛先は下記）。



教育センター関係教員（○は部門長、\*は兼務教員）

センター長：本名俊正

教育開発部門：○田畑博敏、吉野 公\*、後藤和雄、石川雅雄、井上順子、永松利文、桐山 聡、武田元有

外国語部門：○筏津成一、福安勝則、武田修志、サージャント・トレパー、松本雅弘、和田綾子、小林昌博

健康スポーツ部門：○福元和行、上野耕平

教職教育部門：○山根俊喜\*、小林勝年、柿内真紀、大谷直史

※ 外国語部門、健康スポーツ部門の兼務教員、学生生活支援部門、附属学校連携部門の関係教員（全て兼務教員）は割愛



編集・発行 鳥取大学教育センター広報誌編集委員会

電話：0857- 31- 6775（内線 2485）

E-mail：[k-morimo@adm.tottori-u.ac.jp](mailto:k-morimo@adm.tottori-u.ac.jp)